



遠門
 號 882
 卷 5

旭之

繪本傾城飛馬始五之卷

造り物平舞臺見附金襴東西又奇麗もの障子家律

但燭基燈一何のハツ代丹下名草甚名衛清

せりあふて居る人々けりさがりそて道具簡ふ

「サア望う山と此親にもや清きおと早ふ後せ「イヤのおと老

ほれめ折角身共ぐこの一と清き書それとめぐまを物せおとい

ふとの奴の「ふふても細ふても名草郡小楠籠る尼子浪人共

討手の清きおと是此方小入用か「此清きおと早ふいへん、押

らぬハ尼子の條類トやふ「この言いごとと後せといふ

よりころる尼子より三すつううは内おとまより出てせり合あう尼とやめて

息をホボトトの、おとまをいひはなれりおとまより出てせり合あう

まよりいふところと「大切なる神おとまより小のあしぬトあしぬ

明治三十二年
 十月十日
 購末

皆よりてあつたてたのひのう「イヤ実尋はる吏があつたのふト
「ヤアそら」ト「むう」忘れぬ王章「何と」
かみ跡實へがあつたの「スリヤ粟崎の後室とらち」
「ワト」
の女房洞「さうさぬト」
ぬ「イヤ」言訳ゆも回倒る「言訳ト」
ト「合方」
わ「あつた」
あ「つた」
名草の郡又城とき「百姓」
鹿之助「一」

忠義ト名ふ邪兆乃ト「主君」
吏と得を其恨と暗人「百姓」
最悟もえへ「悪心」
知すのと思ふて「現」
つれる「おの」
懐胎「二子」
又二人の産子「この」
も身「流」
上のせり「中」
ふと「より」
二人の子「供」
「その」

く「甚」
く「甚」れと申す男子は四郎佐女子と申す後「
る名成人とあることありては定めて仮名実名とも小「
夫其の義久「
惣大将と云ふ教ありて四郎義久と名乗るがニヤ身共が流ら
かきど子どやと云ふ者「
久との流といふと「
ておのれと將は出世と心付則義久殿の二重鶴のちりとせがれ
そとせ亦義久殿のちと將が誕生の年号と下世男難とつけて出
雲の岡大社の鳥井の傍に捨子とある「
流と捨てまふて「
も將が方便さ「
女郎のがたへ足をまきといと

是も年号ありと女難と付て「
捨て「
一人の將と百姓從黨の天將軍と申す身共「
あつちの追付四海の武將其時「
行と此「
この「
主の招れと捨てまふて左の袂子と主人の流と致して得る人の大将
と「
て「
の其時「
足腰をぬ甲斐之助「

の討ちとあれは、侍が為の仇敵女のすまふ幸いお役目トや甲斐之助と殺せしや、義理あり、執子とも大切なるお王様、このやうな不義なること思ひ、斯うお茶のよ、とておられて、
家譜代の侍三左衛門が娘のすまふ、命と捨て、甲斐之助も高名を柄と、縁ありぬ、女も、忠義を、
お入、三子と結、表向城のむ、と、善心、成て、
お入、一やア、十ヲ九の仕、此方の企、縁の女が、
馬鹿おりの、一、
ト此時三方の、一、
一時は、
甲斐之助と、
お入、
後室、
一、
二子の、

お知、一、言、一、
御簪代、若殿へ、義理と忠義と、
一、
一、
女、子の、
其、女、ま、子、と、
一、
一、
一、
一、
一、
一、
一、
一、

つゞき娘のせむしをさうさうけてわれが血汐と杖血汐合符して甲斐之助殿
は用ひていふに都府殿「やんぎんあつた後室男女の二子女妻子の血汐の
搦ひさうこそ」ややくそくやうめて「二子の行はれ初男子の血汐を
ト両人切てお見「ア」を都府殿せんあうこあう「三浪家へ只養子
とすうおれんあうに養子」おと身をも粟島三左衛門殿の二女子の
男子であつたう「ア」さうさうが「ア」あもさうと知る「最前の親子
の血汐を親子と思ひ」伴が血汐をお別し「他人とおもあころさ
け血汐を」自姓とあうう二女子の兄弟「ス」忠義を祀りて
「腹切さうと若殿の御難病」本腹さう二人が血汐「戦場の
討死もさうさうの高名」月君の御為「後室」都府殿の
「あう」時「別し」ト死る時「あう」お役はさう「あう」

ト西人うん合して思ひ入あうと後病はさう「ア」の彌生とあ
と毛利の岩姫「尾子の仇は根とさう」ト西人切てうらさ「おとさう
逢ハ」名々の城の二味ト三人さうの肉をさうさう「ア」ヤア
おと後室の共部殿「是秋が最期も若殿の御本腹」ア
「あう」の岩姫さうが血汐と甲斐之助殿「ア」五はばし御難病を
直さうとて現在の「母」さうのお乳の人「ア」ア「あう」覚悟で最前
の時宜味「これ」トおとあし「ア」勿律も何のお恨と「ア」あうの
出陣小毛利の仇も清「ア」ア時刻が移るお却て妨は「ア」アも早
岩姫殿の一子「ア」ア用さうの常持とせけう鎧トさうさうさうさうさう
と血汐「ア」ア現在をさうと悪人さうれど「ア」ア小物より「ア」ア
てよの「ア」人の心も「ア」自在さうあり「ア」栗島のお家は「ア」子孫と「ア」



尼子義丸
市川親十郎



山中鹿之助
大谷友右衛門

頭具乃音爾波
年可徹留
由政通
多計
右

五郎侍連五郎 其侍連五郎が身と不忠者と
又拾ひ人とならざる某と云ぬが拵る尼子暗久が胤の義九可何
子細る寂然後室の物語り其拵子くろく 又居る侍連五郎
コリヤト 下の方難と云ぬが侍の産れ月日又我又付あ二重
侍のちうらめが侍の四郎他又付至暗久の胤ありと人を中や
つた此乃の諺及蛙を口より思つてあはれは是天命何と胸よりや
ろくろふかろ 一 叔と寂然の拵子といひこあらは 五 尼子の胤と
上ら今より改め父の多念を受つて義兵の旗上一子して侍全
人の胤ありとられぬの悪のむと 五 好斐内の出は 一 悪斐子望
しや ト 叔と寂然の胤と云ぬ 五 一 谷コリヤと云ぬ 一 其の寂然 ト さん侍連五郎
あつて 一 侍あられハ ト 下の方難と云ぬ 一 出陣の制限 一 ヤア ト ふうなる下の方

五郎侍連五郎 其侍連五郎が身と不忠者と
又拾ひ人とならざる某と云ぬが拵る尼子暗久が胤の義九可何
子細る寂然後室の物語り其拵子くろく 又居る侍連五郎
コリヤト 下の方難と云ぬが侍の産れ月日又我又付あ二重
侍のちうらめが侍の四郎他又付至暗久の胤ありと人を中や
つた此乃の諺及蛙を口より思つてあはれは是天命何と胸よりや
ろくろふかろ 一 叔と寂然の拵子といひこあらは 五 尼子の胤と
上ら今より改め父の多念を受つて義兵の旗上一子して侍全
人の胤ありとられぬの悪のむと 五 好斐内の出は 一 悪斐子望
しや ト 叔と寂然の胤と云ぬ 五 一 谷コリヤと云ぬ 一 其の寂然 ト さん侍連五郎
あつて 一 侍あられハ ト 下の方難と云ぬ 一 出陣の制限 一 ヤア ト ふうなる下の方

地の案内 一 自苑とよふ入地利の二巻此上々毛利の家國 一 天の羽衣有處と傳ふ一首の哥とそれ トヤ弘 紀の語ふる名
草の岡のさくら花おらて岩間の香とえさうんせんあききり 後
日の證據 一 ヤアとスリヤ四軒と敵の身がつうふとれ ト首とくうあけ
緘又コリヤ倅四郎が首チエト トコノアウエマシ 一 倅とほて養を因あ
せ 一 伴達五郎ハ尼子暗久の流とまげ 一 當家の仇 一 忠孝却てあご
敵と 一 あさぬ中成母ハ 一 えへ度にてお乳の人 一 全後親子の縁も
てらきれば ト引也れあまき 一 悪変とよむも倅が玉世四郎が敵期とどぐ
とト引也れと 一 一とよも明がと鶴の啼音 一 人のよとよ 一 のつてやと
又 一 一とよも吾痛 一 殿方の御出陣 一 此をののめ 一 謀友の門出ト倅
五郎甚まきが首とゆんと切まぬさうらう 幕

送り物見附黒幕西の方障子家倅真中ノ荒荒流の上ノ御敵
立ありの舞臺真中より橋がうへ板松間小狛捕進を根ん
がうと小火消用心道真立あぶる在御奇とて幕むくくと
百一やう三人門口の外にて

火打のそと 一 あんと今年と十才の方他 一 やがよるゆめと寸善尺魔
何からつと助らやと思へ町くの且形流も 餅米うくられた茶香物大
根えものごとあいとつていりうまうちらとらうが世あてちうあやとあ
せふやうの志うふもあさふがうふ身う 一 物あしびとてせらべんよ
とらとや 一 や又我の志れをどのふよも志うふもあさるが危角の
かると福ざり代官此秋入もあうへさうらあせざげられと 一 それくや

又アノ代官殿とのめりむせうよれよる款を者ら何と見えしめ小こ
して一甲一ふやそれ又付て彼名草の百姓が何のすて代官と
ららちよら碎れそれ軍が起りたがな其大將の名ハ尼子と
やう尼出とやうとあやうくさの名であるぞ 百姓の軍あつくとも
むらゝの「ア」人更の目代おけと代官がさうぞ
「ほん」代官とやむ之よりかれトはく「代官友平
らららて信すけり信すけりせ出候衆より「これ」お代官の「河」若
らららけるは百姓三人付て生替と下候（あ）
「旁」万よんぞあねも當村の庄屋萬作でりける「其外」地
下「の」百姓でりける「河」用の「力」作りたりすふ「秋」遠く「西」
なを百姓どもとや身がらとより「か」
子「が」余「が」謀「友」と企「名」草「の」郡「は」城「と」築「立」てり「の」小「勢」る「は」尼「子」

四郎謀斗とめげし一味の者と所よふせ至京都も余類の者ども
あれあつし油ひあつしと殊更怪しき法にて人といふは軍
用のもごとふとるとの事詮義いことと莫太の廢養とらふ「そ
有」が「ふ」ら「つ」ゆ「の」身「も」は「是」より「次」の「村」へ「あ」り「詮」義「せ」ん「志」つ「と」や
渡「し」て「も」在「五」万「作」次「の」村「へ」案「内」せ「い」
ト「哥」友「平」を「何」と「き」び「ん」詮「義」ト「や」の「一」され「ら」の「ア」た
ら「う」代「官」が「あ」つ「ら」る「を」く「つ」つ「と」物「と」や「ら」ふ「と」の「や」こ「の」事「の」お「い」つ
ろ「ト」や「グ」せん「き」は「さ」も「の」あ「の」屋「う」び「や」ら「ふ」次「の」村「へ」案「内」せ「い」
や「ら」れ「と」大「名」の「つ」か「と」不「グ」廢「養」と「ら」ふ「た」い「ト」や「命」が「け」は「進」一
と「の」さ「ら」ら「い」で「も」あ「ら」ん「と」の「ト」や「何」と「云」つ「一」や「や」ら「ん」の「あ
で「も」あ「ら」莫「太」と「ら」や「ら」ん「と」廢「養」と「や」ら「ふ」の「で」あ「ら」す「の」お

こゝろを何はのころも「世と舞あつたれ曲があらざりて」
と連き對の小袖でまよふとて外にまひゆく杖を言つて
「さうさう是はおどろけりてあつたふらふらひあれは
かよと取てあげおとろけりてあつたふらふらひあれは
おとろけりてあつたふらふらひあれは
拙者が清主人らと致さるゝ雑と出られそれらの狂氣
及んと松坂法印を清祈禱をねん為人目と思ひ今の
清祈禱の義を忍び計り「三氣の毒を法印にさしつけ
浮てまよひ〇己義のお人あつたお山依りや本姓はあつた
急度礼がら「爰小金子三拾兩多是とねの京ト
おとろけりてあつたふらふらひあれは

清祈禱の義を忍び計り「三氣の毒を法印にさしつけ
浮てまよひ〇己義のお人あつたお山依りや本姓はあつた
急度礼がら「爰小金子三拾兩多是とねの京ト
おとろけりてあつたふらふらひあれは
拙者が清主人らと致さるゝ雑と出られそれらの狂氣
及んと松坂法印を清祈禱をねん為人目と思ひ今の
清祈禱の義を忍び計り「三氣の毒を法印にさしつけ
浮てまよひ〇己義のお人あつたお山依りや本姓はあつた
急度礼がら「爰小金子三拾兩多是とねの京ト
おとろけりてあつたふらふらひあれは

和文

と双^{たふ}方^{かた}より^{より}つる^{つる} ^掃 ^山 ^の ^ふ ^ト ^長 ^抽 ^の ^技 ^と ^手 ^三 ^ノ ^と ^黒 ^幕 ^切 ^落 ^と

平

繪本頂城飛馬始五之卷終

